

## 巻 頭 言

# 社会情報学の門出

社会情報学部 学部長 田中 一

社会情報学はその扉の開かれる日の到来を強く希求している。今ここに扉への途が敷設された。社会情報学部紀要の創刊である。この途を歩んでその実りを現実化し得るか否かは、今や我々の手に委ねられている。

社会情報学の今日は、学として未だ体系化以前或は形成以前の段階にある。紀要編集委員会は、今後、投稿論文に社会情報学の論文として如何なる評価を与えるべきかの決断に迫られて、乗り越え得ない障壁が立ちはだかっていることを痛感されることがあると思う。この当惑は真に自然でもあり当然でもある。専門分野の学術論文の評価は、これを可能にする当該分野の評価体系の形成を俟って始めて可能となるものであるにも拘らず、学形成以前とは、この評価体系が未形成であることを意味するからである。

併しながら、本学部紀要への投稿論文を評価しようとする努力は、社会情報学の評価体系の形成とこれを介した社会情報学の学としての形成と体系化とを促さざるを得ないのではないであろうか。ここに、本学部教員諸兄姉と紀要委員会委員諸公の活動に対する大いなる期待があると言わねばならない。

近年諸学の専門化には実に著しいものがあり、多少とも異なる専門分野の研究内容を理解することは実に困難なことになりつつあるが、ここで見逃してはならないことは、異なる専門分野間の相互理解の障壁が、決して専門分野間の相違にのみよるのではないことである。それは各研究者の研究活動の在り様にも依存することである。

専門的研究の研究課題は必ず研究課題の母胎の位置を占める課題意識を前提しており、課題意識は当該専門分野の研究動向に位置付られ意義付けられている。この位置付けと意義付けとを明確にしていく事は言うまでもなく研究課題の深化であるが、他方では異なる専門研究者の間の相互の理解を促す契機にもなっていくように思われる。

本学部には社会学と情報学を始め多くの分野の専門家が日夜研究に携わっている。各々の専門分野を個別科学として尊重することは当然の事であるが、さらに紀要に投稿される方々が投稿論文に対する異なる専門分野の研究者からの理解を広く求めるよう努めて頂くことは、われわれ自身の研究を深化させる上でも貴重なものと確信している。社会情報学部の紀要が、新しい分野の開拓と研究の新しいスタイルの形成を齎していく事を心から願ってやまない。

1991. 12. 20